

## 「エーゲ海クルーズ」の報告

2022年9月3日～10月3日

2022年、我々ヨット部の同期は喜寿を迎えた。これを期して、一年の半分をヨットで過ごす同期の松崎君の持つクルーザーで、エーゲ海の島々を巡ることにし、成田からドバイ経由でアテネに向かうことにした。

ドバイはハブ空港なので、経由の飛行機が多く、ボードに搭乗口案内が、すぐには出てこない。アテネまで、フライト時間があるのでビールで喉しめし。4時間ほどのフライトでアテネへ。道中、飛行機から見下ろすエーゲ海に、これから訪れる島々の姿が点在、期待にわくわく・・・アテネで岡山からの同期と合流し総勢4名が揃った。迎えに来てくれた松崎オーナーの案内で、バス・フェリーでサラミナに停泊中のヨットにたどり着く。



これから1か月間、ヨットで暮らすのでビジター4人のルールを決めた。童心に帰って全て「あみだくじ」で。①荷物の置き場②食事後の皿洗い担当順③男どうして狭い部屋では寝るのは？「甲板or部屋」を順番で・・・円満に決まってから、トイレの使い方など諸設備の説明をうけて、オーナー細君が準備してくれたウエルカム・ディナーを船上で。学生時代の話から、最近の国情など話は尽きない。長旅の疲れを「美味しい料理と美酒」に酔しれて、夢の世界に・・・どうやって寝たか記憶なし(笑)



まずは、せっかくなので、アテネ観光。乗ってきたクルーズ船で、サラミスからアテネへ戻り。地下鉄に乗ってモナスティラキ駅に到着、まずは昼食を賑やかなで広場、ギリシヤ料理のギロピタ・ギリシヤコーヒーを。そこから遠くに見える、アクロポリス遺跡・パルテノン神殿まで坂道を歩き、帰りに国立歴史博物館により、古代ギリシヤの栄華の物語を堪能した。





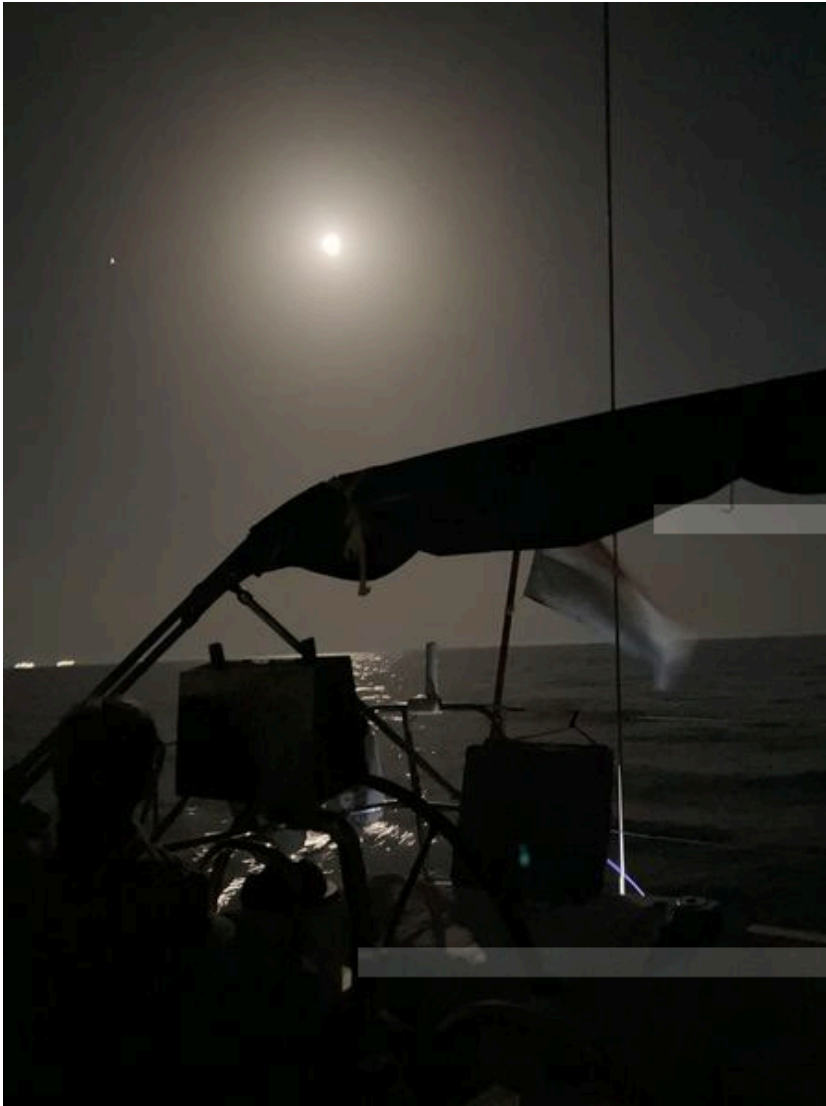
今日も風が強くなることが予測されるため安全を第一に考え、車をレンタルして、リリカからフェリーでアテネの西にあるコリントス運河・ミケーネを訪れた。この運河は1893年に始まり、2600年に開通した高さ80m・幅23m・距離6.3KMという歴史的な運河。帰りにミケーネの古代遺跡を訪れ、人類の歴史に触れ、その偉大さを十分に味わった。

高速道路で予定より早く帰れたので近場の海水浴場で、初めてアテネの海に触れた。温かいけれど足元が砂でなく痛かった。



良い風になってきたので、いよいよクルーズに出発。3日間停泊していたサラミスから、パーシに向かう。昨日登った丘にはギリシャ国旗がはためく。6時間くらいのクルーズで到着。とても静かな港で、雰囲気はグッド。

夕食は目の前のレストランで、魚は直接選べということで目利きが吟味。港に沈む夕日も情緒をそそる。



今日は、中秋の名月  
ということでナイト・クルーズに決定。  
15:30に出て60マイル・20時間のクルーズでキトノスに到着。5人が交代でスキッパーを担当。  
終わりの朝方は強風のため、セールをリーフして航行。  
道中、エーゲ海の海に浮かぶ満月を堪能し、朝の日の出を仰ぐ。



俳句に詳しい同期が句会を開催。私は次の3句を

月明り翁が集い舟遊び

満月のギリシャの海に銀の道

舟ゆられ見上げる空に星月夜



ナイトクルーズは交代で寝ることにしたが、実際は海が荒れ徹夜に(泣き)そんなことで、到着後、ただちに海中温泉に直行。湯加減も良く、温まったら海で泳ぎ、疲れを癒す。夕食は海辺の素敵なレストランで、ギリシヤ料理を。

船長ミーティングの結果、今日は強風の予想なので出航せずにステイ。安全第一「予定に追われない旅」の醍醐味。

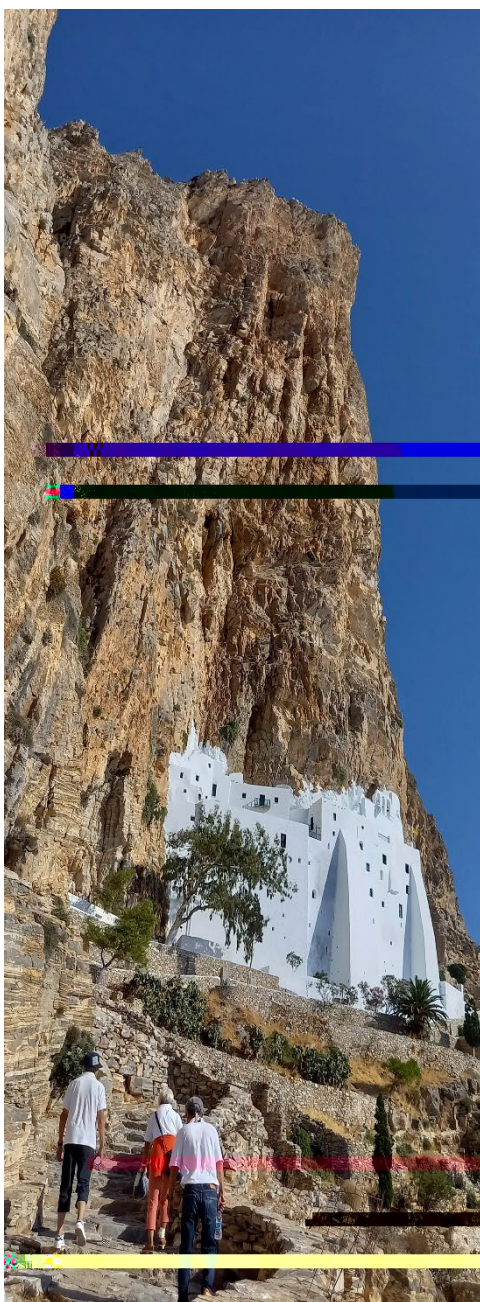
一番速度がでるアビームの風がきたので、早めに出発、シロスを目指したが風が良く 7.5 ノット位でたので、この島を横目にパロスを目指すことに。多くの島々をヨットで巡る良さを発揮。パロスはさらにエーゲ海らしい風景、島の街並みを散策した後、夕暮れに海岸沿いのレストランに。ここは観光地なだけに物凄い人波。



朝、ナウサからバリギアまでバスで、そこからフェリーでミコノス島へと考えたが、運賃が一万円を超えるのでやめて市街見学に。ここはツーリストの拠点になっているので観光客が凄い。最古の教会・砦・考古学博物館を見学して戻り、時間があいたのでワイン工場を見学・試飲・購入して舟に。海水浴場にはトップレスの女性もチラホラ。今夜は奥様手作りの料理を満喫。ローソクのランタンの光のもと懇談。

朝、8時にエーゲ海の隣にあたるパロス島を出航、アモルゴス島へ。エーゲ海らしい静かな港町。8時間ほどの長いクルーズ、嬉しかったのは、川崎でも手に入りにくい「大師巻」を、「おやつにエーゲ海で」という奇跡。

風が強いので暫くステイに。レンタカーで島内を散策。絶壁にしがみつくように建てられている修道院は圧巻。戒律が厳しく短パンは不可、長ズボンが用意されている。この島の、白一色の街並みと、ブーゲンビリアの赤との対比は見事。





クルーズも中間になり、一日休養日として洗濯・荷物の整理など各自、自由な時間を持った。

食事の帰りにポーランドの舟の皆さんと交感。ハグした元気な高齢者は89歳、胸板の厚さに圧倒された。



アイスクリームを食べた店の女性がフレンドリーで、久しぶりに東洋人ぽい人。聞けば、フリッピーとのハーフとのこと。

良い風に恵まれ、アンティパロスへ向けて出港。ここで、初めてのアンカリングで湾のなかに停泊して過ごすことに。海水は気味悪いほど透明、5m下の水草が見える。買い出しはボートで陸に、フリマは無かったので、レストランとで食事してケータリングに。夜は、月も三日月、舟の周りに光もないので、満天の星がくっきりと頭上に、北斗七星を探すなど童心に。静かに眠れた。

